

回顧（千三小学校のこと）

伊藤 多恵子

千三小第2回卒業生伊藤千恵さんの母上で準備委員長として千三小学校設立に非常な貢献をされました。

編集部注

人は好むと好まざるとに関わらず、社会の連帯の中にある。そしてその社会とのつながりが、その人を変えてゆくのも事実である。私が、社会と大きく関わったのは千三小学校であった。

昭和も四十年代になると、世の中は落ち着き始め、くらしの中に仕事と家庭を切り離す風潮が高まり、商都大阪は空洞化し、郊外への移動が始まった。俗に言われるドーナツ化現象である。そしてそれを諸に受けたのが千里山周辺であった。

千二小学校の児童数がみるみる膨れ上がっていった。そんな折、私はPTAにご縁をいただいたのである。「このままで行けばすぐに生徒数が二千を越える。そうなれば正常な教育が出来なくなる」。時の校長福井勇先

生は大急ぎ打開策をと考えられ、市役所通いが始まった。当時会長は男性で、校長のお供は副である私の役目となっていた。

教育委員会の対応は早かった。教育長や次長、市の関係者が各地を歩いて下さり、当然私も校長と行動を共にしたのである。そして決定をみたのは現千三小学校の所在地（千里山西二丁目十三―二）であった。当時現地は竹藪で、かなり湿地であったため、私は長靴を着用していたことを覚えている。

古い歴史を有する千二小学校を創られた子孫の皆様が、この現実を的確にご理解下さり、お認め下さるだろうから、これが当時の私の最大の心配事であった。千二小学校は、阪急線より西側区域の皆さんを中心につくられたものであり、言わば母屋を放棄することになる。大きな犠牲であることは解っている。何としてもその犠牲に報いなければならぬ。私に出来ることは何か。自問で得たのは、吹田一の小学校をつくってもらうことであった。最も優秀な先生方を集めてもらいたい、私はそう申し出た。常識の範ちゆう外の言動であることは、承知していた。だが、皆様への想いが私を動かしていた。

案ずるより産むが易し、であった。皆様の意識は高く、不平の声は私に届かなかった。

千三小学校初代校長小阪武清先生のご尽力をいただき、素晴らしい先生方と共に、昭和四十三年四月、千里第三小学校は開校した。校舎は未完であった為、千二小学校旧校舎を借り、生徒数四百九十八名三年の小規模ながらの出発であった。

その時、私は準備委員長の重責にいた。

昭和四十三年八月、校舎は完成。八月三十日移転の運びとなった。だが、私が残念でならないことが一つだけある。全てが新しづくめの中で、運び込まれたのは古机であった。千二小で使用していた物である。再三申し入れていた新しい机は予算上実現不可能とのこと、今でもそのことは心に残っている。

二学期が始まり、校舎のみであった千三小学校は、水泳の授業のために千二小学校のプールを借りなければならなかった。往復に二キロ近い道のりを、暑さの中歩くのは、子供達にとつて過酷であったに違いない。「来年夏までどうしてもプールをつくらなければならぬ」との強い思いが私の心を占めていた。

との確認を吹田市から取ることを忘れなかった。道路は立派に修繕・舗装されたが、剰余金がそっくり市役所に預けられたままになっているということであった。

山崎先生は、地域に役立つ使い方をする為には、千三小学校に使っていただくのが最適だとおっしゃって下さった。

四十三年六月、千三小PTAが結成され、私の準備委員長の役目は解かれていたが、初代会長に選ばれたのが夫伊藤徳次郎であった為、夫が交渉役となり山崎先生と役所へ。役所もその事実を認めて下さり、予算化、工事着工となった。四十四年六月完成、プール開きが行われた。これは地域が持つ大きな力をいただいたことになる。

次は体育館であった。吹田市は年々児童数が増え続け、学校建設の必要に迫られていた。千三小体育館は後まわしとなりかねない。何か強いインパクトを持った手だては無いものか。そこで思いついたのが千三小を、吹田市のモデル校にしたいということであった。他市や他県から見学の申し入れがあった場合の代表校にしてもらうこと。

そしてそれは実現した。

それより先、私は黒川幸夫先生(当時西五丁目在住、医師、千二小PTA会長経験者)から、千里山地区として市役所に、なにがしかのお金が預けられているはずなので、山崎薫先生(当時西四丁目在住)をお訪ねするようとの助言をいただいた。当時山崎先生は、大阪高裁の裁判長で、ご多忙であられたにも関わらず、その事実を詳しくお話下さったのである。

千里山住宅地の道路は開発当初より開発会社が所有、修繕管理も行っていた。京阪がこれをそのまま引継ぎ、「修繕は一切当社で行う」との一筆を入れ、当時の千里村に道路を寄付、合併により吹田市道になった。

戦後、京阪と阪急が分離、阪急が修繕を引継いだはずであるが、引継の不備で阪急は管理責任を認めず、修繕をしなかった為、あちこちで下水管が破れ、土が流れて大穴が開く惨状を呈した。

困り果てた千里山住民の為に山崎先生が先頭に立ち、吹田市と阪急を説得され、阪急に責任を認めさせた。しかし阪急も戦後の輸送復旧でお金が無く、千里山住宅地周辺の土地約一六、四〇〇坪を吹田市に寄付するのでこれを財源に吹田市が道路の修理をして欲しいと申し出、吹田市は受け入れた。その時山崎先生は「処分金は千里山住宅地域の発展の為に使用する」

かねて私は、手塩にかけた千二小学校を、すんなり開け渡して下さった西側の皆様に、どういう形で報いるべきかを考え続けていたので、この実現は最高のようこびであった。工事着工、四十六年七月完工。そして、四十三年、四十四年、四十五年と続いた夫の会長職は終りとなった。

私達が千里山西三丁目に居を構えたのは昭和二十九年秋。結婚と同時にあった。そして三児をもうけ、長女長男は千二小学校、次女のみが千三小学校と相成った。

八十才になんなんとする今、社会と関わり、人を愛し、愛され、子によって自分を成長させることが出来たことを、感謝する毎日である。

過日、杖を従えて歩いてみた。

かつて子の学びの道や笹子啼く 多恵子

平成二十二年六月記

千里第三小学校開校式 昭和44年6月28日

(プール開きと共に開校式を行い、この日を創立記念日と決定した)



うれしそうな子ども達の顔顔顔……



昭和53年5月撮影 千里第三小学校全景